

玉虫色表現行為の現象学的解明

淑徳大学 心理学科教授 吉田章宏

はじめに

この論考では、日本語で「玉虫色の表現」と呼ばれる種類の「意図的に曖昧にぼかした」表現を用いる表現行為の構造と意味を、現象学的に解明することを試みる。

最初に、この問題への関心が、私において生じた発端と経緯を述べる。そして、具体的な事例を挙げつつ、この問題そのもののさらに詳細な提示を行う。その上で、玉虫色の表現がどのようにして、個人および社会において、発生したと考えられるかを考察する。以上を基に、玉虫色の表現行為の構造と意味を考える。さらに、玉虫色表現の素朴な形態から展開した形態までの発展の経路と段階を考察する。それは、直ちに、玉虫色表現の多様な動機と機能の問題へと繋がる。ついで、玉虫色表現の可能性の根底に人間の認識と理解の多視点性があることから、玉虫色表現と現象学の意味との関係について考察する。さらに、「玉虫色」という日本語表現の独自性を、同義の英語表現との対比において考察する。さらに最後に、玉虫色表現を非難する立場から玉虫色を礼賛する立場への移行の可能性を省察する。

問題の発端

この考察を私が開始するに至った切っ掛けを述べる。何時の頃かわからないが、或る時、日常的に出会うことのしばしばある幾つかの表現行為が、「意図的に曖昧にぼかした」という意味で「玉虫色」の表現行為であることに、気づいたことがあった。そして、そのことに一旦気づくと、それまで「玉虫色」の表現行為であるとは気づかなかった行為も、玉虫色の表現行為である、と次々に気づくということが起こった。そして、「玉虫色」の表現行為が、広く遍在していることに気づくようになった。そのことと、私の私的な幾つかの経験の意味とが結びついて、よりよく理解されるようになった、と感じるようになった。しかし、その頃は、世間で常識的な私には思われた見方、すなわち、「玉虫色」の表現行為に対する否定的な非難の気持が、私の評価感情に密かにしかし根強く在ったように思われる。全体として、この行為の遍在という気づきは、私の中で、ある不協和音を形成していた。すなわち、一方ではこの行為が遍在していて、日常的であること、他方には、この行為は批判されるべきであること、この両者が、不協和音を起こさずにはいなかったのである。しかしまた、或る時、私が、自分自身、「玉虫色」の表現行為を為している場合があることに、気づくことがあった。自らは、「玉虫色」の表現行為を非難する気持を持っておりながら、自らの、少なくとも時折は、そのような行為を自らも為していることに、気づかないではいられなかったのである。それもまた、私の中で、当然のことながら、不協和音を形成した。そして、いつか、以上のような事態について、ゆっくり考えてみたい、と思うようになった。もちろん、その構造と意味も、まだ鮮明ではなかった。しかし、鮮明ではないにせよ、ぼんやりと見えてくるような思いも抱くようになったからでもあった。

「玉虫色」の表現行為を解明したいと私が考えるようになった動機は、何だったろうか。一つには、他者の悪意に満ちた表現行為と当初思われるものが、ものの見方を変えると、つまり、異なる視点から見ると、必ずしも悪意によるものではないとも理解されうることに気づき、そのように見方を変えることの面白さを愉しむようになったということ、がある。そして、そのことが「玉虫色」の表現行為の問題の裏面にあることに気づき、「玉虫色」の積極的な意味にも、少しずつ、気づくようになった。そこで、「玉虫色」を積極的に肯定することが可能なのではないか、という思いを生じるに至った。そして、ここには、人間の間の争いを少なくする叡智が隠されている

のではないか、という思いさえも抱くようになった。しかし、その思いは、基本的には「玉虫色」を非難する常識を抱いたままでは、全体としては、それまで以上に、不協和音を響かせるだけだった。「玉虫色」の表現行為の構造と意味を現象学的に解明することによって、その行為の、消極的な意味だけではなく、積極的な意味も明らかに出来るのではないかと次第に考えるようになった。それが、この行為の構造と意味を解明してみたい、と私が考えるようになった動機であるように思われる。

「玉虫色」の表現行為に対して否定的な、消極的な、ある意味では、「非難」でさえもある評価がなされることがある。その評価の暗黙の内容をひと通り考えてみよう。

「玉虫色」の表現行為への否定的評価の内容は、比較的考えやすい。それは、以下のように表現されるであろう。

「何を言わんとしているのかははっきりしない。」「本来率直に述べられるべきである本音を言わずに、意図的に曖昧にして誤魔化している。」「うまく誤魔化されたと感じさせる。」「率直でない、正直でない。」「自らの考えや意見を表に現さずに、総ての人々を満足させようとする狡猾で腹黒いやり方ではないか。」「誰に対しても気に入られようと、八方美人であろうとしている。」「どちらも満足させようとして、どちらも満足させることに失敗した優柔不断の表れであろう。」「どちらの立場なのか、はっきりしない。敵なら敵、味方なら味方と、はっきりしろ。」「本来なら、明確にものを言うべきであるのに、不明瞭である。」「西欧の文化で尊重されている『明晰さ、真実さ、厳密さへの要求』に抗うものである。」「・・・などなど。

もし、リクールの『フロイトを読む』に従って、信頼の解釈学（フッサール）に対比される、懐疑の解釈学（マルクス、フロイト、ニーチェ）によるならば、「玉虫色」の表現行為は、確かに、まさに、底知れず隠された意図を秘めた表現行為として、疑惑の眼差しを差し向けるべき対象となりそうである。では、その秘められた意図とは何で在りうるであろうか。

そうした、消極的で批判的、否定的な評価にもかかわらず、「玉虫色」の表現は消えてなくなる。むしろ、気づくにつれて、その日常生活における遍在に驚くばかりなのである。そして、また、現実には、「玉虫色」の表現が、積極的に選ばれることもあり、むしろ巧みなそれは、時に、賞賛されることさえもあることにも気づくのである。人々は、「玉虫色」の表現を好むことさえもあるのだ。

こうして、私の問いは、「玉虫色」の表現行為は、広く一般に非難され否定され続けてきたように思われるが、しかし、果たして、それだけで済ませてよいのか、という問いとなる。「玉虫色」の表現行為への礼賛の可能性の余地があるのではないかと、という問いとなる。この段階では、この問いの単なる提示に留めることにする。

問題の提示

ここで、「玉虫色」の表現行為の解明の試みに先立って、まず、極めて一般的に、いわば日常的な常識の世界を代表すると思われる、国語辞典において、どのように説明されているか、幾つかの辞典により、一瞥してみることにしよう。

「玉虫色」：「俗に、文章などで、どうしても受け取れるように意識的にぼかした表現。『この協定は玉虫色だ』」（「岩波国語辞典 第三版」岩波書店、1980年）と説明されている。以下同様に、「見方によってどのようにでも受取れる文章などのぼかした表現」（「国語大辞典」小学館、1981年）。（「見方や解釈のしかたによってどのようにもとれること。文章などの表現についていう。『玉虫色の答弁』」（「日本国語大辞典、第二版」小学館、2001年）。インターネットで調べた、「大辞泉」には、「見方や立場によっていろいろに解釈できるあいまいな表現などをたとえていう語。『玉虫色の答弁』」とある。

国語辞典のなかには、「ぼかした表現」を表す語としての「玉虫色」についての説明は与えられていないものがある。

さらに、興味深いことは、「角川古語大辞典、第四版」（角川書店、1994年）には、上記の「ぼかした表現」としての説明も用例も、「玉虫色」の項目には見当たらないことである。ただし、「玉虫」の語には、「虫名。甲虫類。本州以南に分布する。体長3—4センチメートル。紡錘形をなし、背面は金属光沢を有する金緑色で、二本の銅紫色の縦条があり、反射光線の角度により色彩が変わって見える。幼虫は桜・樅・樺・榎・柿などの老衰木に寄生して食害する。前羽が美しく堅いので細工物の装飾に用いられる。法隆寺の玉虫の厨子は特に有名。」と詳しい説明が与えられている。また、「玉虫色」については、「色名。特に織り色にいう。縦糸と横糸との色を違えて織った絹織物の色で、反射光線の方向により、玉虫の羽のように金属光沢を帯び、緑・紫・赤などさまざまな色合いにみえるもの。」と説明されている。つまり、古語としては、「ぼかした表現」を表す語としての「玉虫色」は用いられていなかったのではないかと、という推測を促す結果が得られた。言い換えれば、「ぼかした表現」をあらわす語としての「玉虫色」なる語は、比較的、近年に生まれた用法ではないかと推測されるのである。

ついでに挙げておくと、研究社の「カレッジライトハウス和英辞典」（1995年）には、「首相の答弁は玉虫色だった」の英訳文として、“The Prime Minister’s answer was equivocal [ambiguous]”が挙げられており、「ぼかした表現」としての「玉虫色」の訳語には、“ambiguous”と“equivocal”の2語のみが挙げられていることを記しておこう。他の和英辞典でも、「首相は玉虫色の答弁をした」の訳文として、“The Prime Minister made an equivocal reply”が与えられている。

さて、以上の、幾つかの国語辞典と和英辞典による探索から、「玉虫色」の比喩的な意味については、以下のようなまとめが可能であるように思われる。

- 1) 語義通り昆虫である「玉虫」の「玉虫色」の意味とは区別される、比喩的な意味である。
- 2) 「玉虫色の表現」は、「文章など」とあり、主として、文章を形容する語であるが、しかし、文章以外にも、適用可能であることが伺われる。
- 3) 「玉虫色の表現」は、「どのようでも受け取れる」「いろいろに解釈できる」という意味で、「曖昧な表現」、「ぼかした表現」であり、「多義的な表現」である。
- 4) 「玉虫色の表現」は、単に曖昧で多義的であるだけでなく、「ぼかした」あるいは、「意識的にぼかした」とあるように、その「曖昧さ」、「多義性」は、表現者により意識的に作り出されたものである。ただし、表現者が「意識的にぼかした」かどうかその意図は不明である場合でも、表現そのものが曖昧で多義的であれば、「玉虫色」と呼ぶことも可能であることは、「意識的」とか「ぼかした」と表現者の能動性に言及している説明だけでなく、単に、「いろいろに解釈できるあいまいな表現」あるいは「どのようにも取れる」と、表現のみの形容としていて、表現者の意図には一切言及していない説明も存在することで、推測可能であると言ってもよいであろう。
- 5) 「玉虫色の表現」の曖昧さの発生の源泉は、その表現を受け取る側の「見方によって」、「見方や解釈のしかたによって」、「見方や立場によって」であることが指示され、示唆されている。
- 6) 4)と5)から、「玉虫色の表現」の発生には、表現者の意図ばかりでなく、受容者の視点・立場・見方などが、関わっていることが示唆されている。
- 7) 辞書における「玉虫色の」の用例に、「この協定は玉虫色だ」「玉虫色の答弁」「首相の答弁は玉虫色だった」「首相は玉虫色の答弁をした」など、それに限るわけではないが、しかし、比較的言えば、政治的で社会的な状況における事例が用いられ易いことが示唆され、注目される。
- 8) 「ぼかした表現」という意味での「玉虫色の表現」という用法は、比較的新しい、少なくとも、日本語（国語）における古語には無かつたらしい、と推測される。
- 9) ある辞書に「俗に」とあるところから、ある時期には、「俗な用法」と理解されていた

段階があったらしいことが、示唆される。

- 10) 「玉虫色の」に相当する英語は、・ambiguous”と“equivocal”の2語のみであるらしいこと、言い換えれば、日本語の「玉虫色の表現」に相当する表現は、無いらしいことが示唆される。英語のこれらの語が、「玉虫色の」という比喩的な表現に較べると、抽象性が高く、しかも、積極的な評価のニュアンスが含まれて居ないことは、注目に値する。また、その語源にも関心を惹かれるところである。

およそ、以上のような論点を読み取って、国語辞典および和英辞典による、「玉虫色の」および「玉虫色の表現」についての探索とその解釈を、ひとまず、終えることにする。

玉虫色表現の具体的事例の幾つか

ここで、玉虫色表現の具体例の幾つかを挙げておこう。これは、国語辞典に与えられた定義的な説明を、さらに多面的に考察するためには、その考察の出発点として、必須なものである。

まず、第一に、玉虫色表現の代表として、「沈黙」を挙げよう。「沈黙」については、Picard, Gadamer, Dauenhauer などの考察があるが、ここでは、沈黙の「玉虫色表現」としての意味と構造について考察することに限定する。沈黙は、決して無ではなく、また、何も表現しないわけではない。表現としての沈黙は、しかし、多様な理解と解釈をその表現の受容者に促すし、また、それを許す。その理解と解釈の多様性において、沈黙は独自である。そして、それゆえに、後に解明するように、沈黙は「玉虫色表現」としての性格を有することになる。玉虫色表現としての沈黙は、普遍的である。沈黙は、沈黙を破ることが表現者にとって可能であるということが表現者と受容者において共通の理解となっている場合には、それにも関わらず沈黙を守っているということ自体が、沈黙に一つの表現としての意味を、表現者と受容者の間に発生させる。そして、そこに発生する意味は多義的ならざるを得ないがゆえに、その場合、沈黙は、玉虫色表現としての性格を帯びることになる。表現者にとって、沈黙を破ることが不可能な場合も、表現者が存在する限り、沈黙は、受容者にとって意味を有する。そしてさらに、仮に、表現者が存在しない場合にも、受容者が表現者の存在を信じている場合、表現の無いことが沈黙として理解され、それは玉虫色表現として、受容者によって、多義的に理解され解釈される。例えば、「便りの無いのは、よい便り」。

第二に、日本語表現「どうも…」を挙げよう。日本語の「どうも…」は、発音される「どうも…」に続く「…」の部分で、何事かが明示的に述べられる可能性がありながら、現実には、発音されず、それでいて、その意味は、表現者と受容者の双方が置かれた状況と、その言葉が用いられた脈絡によって、正しく両者に共通の意味として、伝達されていると考えられる傾向が強い、日本語における、極めて曖昧でありながら、その曖昧さの故に、極めて便利な言葉である。単純な「沈黙」は、場合によっては、その「沈黙」さえも気づかれない可能性を残す。しかし、表現「どうも…」は、語「どうも」によって、それに続く「…」の沈黙部分が際立たされて、その意味を沈黙「…」によって伝達するという不思議な日本語の用法である。その意味では、「どうも…」は、表現「どうも…」である、というよりは、むしろ、「どうも」によって導き出され際立たされた沈黙部分「…」による玉虫色表現である、とも言える。「どうも…」は、したがって、玉虫色表現としての沈黙の一種である、ともいえるのである。

第三に、日本語表現「いかがなものか」も、玉虫色表現である。「いかがなものか」は、相手や他者の言行に対して、直接に明示的にあからさまに非難や批判をする代わりに、「いかがなものか」と疑問形の質問の形をとりつつ、その疑問の意味するところは、直接的には「考えてみて欲しい」と問いかけ、しかし、その内実は、多分に、それは「望ましくない」、「不適切ではないか」、「それが不適切であることは、言わなくとも、あなたには、分かるであろう」という暗黙の批判あるいは非難を込めた

表現である。しかし、この表現は、少なくとも、表面上は「いかななものか」と問う形をとっていて、明示的には、決して非難したり批判したりする形をとってはいない。その意味では、「いかななものか」と自問して、自らの答えは、述べて、相手にその答えを考えさせる問いとなっている。また、「いかななものか」の後には、沈黙をもって埋めていという意味では、この問いの形をとった批判あるいは非難おいても、沈黙が玉虫色表現として、活かされている、とも言えるであろう。その意味では、この表現も、第一の玉虫色表現としての「沈黙」の変種である、とも言える。

第四に、日本語表現「前向きに検討します」も、やはり、玉虫色表現の一種と言えよう。「前向きに検討します」は、文字通りには、「近い将来において、積極的に取り組んで、何らかの結果を出すように努力することを約束する」という意味に受け取れる。しかし、この表現は、例えば、日本の官僚言葉として、「何もするつもりはない」という意味を含意する場合が多いことは、日本においては、広く知られている。したがって、この表現は、「玉虫色表現」とならざるを得ない。

第五に、英語の“apparent”を挙げておこう。この語は、“appear”を原語とする語で、一方では、“manifest”という意味を、他方では、“seeming”という意味を有する。したがって、二義的となり、読み手の読み方によって意味を異にする、玉虫色表現となり勝ちである。

第六に、玉虫色表現は、文章「などで」と定義されていたことに示唆されるように、多義性を含んでいる表現であれば、言語表現に限られない。言語表現以外で、多義性を有する玉虫色表現としては、例えば、周知の曖昧図形などを考えることも出来よう。ここでは、Don Ihde: *Experimental Phenomenology* で徹底的に解明されているNecker Cube を表現として捉えた場合に、玉虫色表現と見なされうることを指摘しておこう。

第七に、仙崖の禅画を挙げよう。この禅画の三つの図形は、解釈者によって、幾つもの解釈が提出されている。いずれも受容されている。どれも正しいとされるのである。

第八に、しかし、少し考えてみれば、如何なる表現も、それが二義的である、あるいは、それ以上に、多義的である性格を有している場合、玉虫色表現となりうる、ということに気づくことができる。そして、如何なる表現も、その意味では、「玉虫色表現」として機能しうることに気づくのである。その意味で、「**総ての表現は玉虫色となる可能性を秘めている**」とも言える。なぜなら、如何なる表現も、受容者の理解と解釈によって、文字通りの意味に受け取ることも、それを、何らかの比喩として受け取ることも、共に可能であり、許されており、しかも、現実にも、そのように受け取ることが起こるからである。

第九に、さらに、多義性は、「**懐疑の解釈学**」の登場によって、少なくとも受容者においては、**総ての表現に生じることになる**。すると、表現者もまた、その多義性に気づき、意識し、さらに、意図する可能性が生じてくる。こうして、如何なる表現も、多義的である可能性を有する限りにおいて、玉虫色表現となる可能性を有する、というべきであろう。

多義性に直面して、それを幾分でも限定するために取られる方策の一つは、否定による限定であろう。受容者における理解に生じうる多義性を避けようとする

場合には、可能性のある理解の仕方の一つ一つ明示化し、その一つ一つの理解を否定して、否定されない理解を明示化することによって、多義性を減少させ、曖昧さを減ずる方策が採られる。「規定とは否定である」(スピノザ)とは、このことを表現している。しかし、否定そのものもまた多義性を含みうることを考えると、多義性を減少させることには限界があることは、否めないであろう。その意味で、やはり、「**総ての表現は玉虫色となる可能性を秘めている**」ことも全面的には否定できないであろう。

「玉虫色表現」の範囲を、このように拡大して理解することは、しかし、一方において、玉虫色表現という行為の普遍性を示す積極的な意義がある。が、他方において、玉虫色表現の意味と構造を拡散してしまう恐れを生じるという消極的な意義もある。そこで、「玉虫色表現」を主題として解明をめざすこの限定された場では、少なくとも一旦は、典型的な玉虫色表現に焦点を当てて、その構造と意味を解明することに限定する。その普遍性とその意味については、あるいは、総ての表現に見られる多義性という問題は、一旦、視野の外に置くことにしたい。

表現の多義性の源泉

ある任意の表現に多義性が、発生する場合、その源泉はどこにあるのであろうか。

「玉虫色表現」が「どのようでも受け取れる」「いろいろに解釈できる」という意味で、「曖昧な表現」あるいは「ぼかした表現」であり、その意味で、「多義的な表現」である、という限りで、その「多義性」の源泉は、第一には、表現者の側の表現内容と方法とに求めることができる。すなわち、例えば、一方には、表現すべき内容の混乱、曖昧さに発する多義性、それは、多義性そのものが、表現する内容に対応していると、表現者にも経験されている場合である。他方には、少なくとも表現者には、既に、表現すべき内容は明らかであるように経験されるのだが、その内容を少なくとも表現するのに適切な媒体における特定の適切な表現を見つけることができず、多義的な表現となっている場合である。例えば、現地に行けば、適切に案内できる程に現地について熟知している人物が、その案内を言葉に表そうとすると、言葉の未熟さ表現の拙劣さのために、表現が多義的となる場合、などを考えることができよう。洗練された玉虫色表現と稚拙さによる玉虫色表現との対比は、巨匠ピカソの素朴なあたかも児童画のようなスケッチと、子どもによる稚拙な児童画スケッチとの対比にもなぞらえることができる。

第二には、受容者の側の表現理解あるいは表現解釈の方法の在り方に求めることができる。すなわち、ここで、あたかもある現実的対象の射影とその射影により統合される志向的対象との関係が多義的でありうるのと同様に、言語表現と表現内容の関係も本質的に多義的である。言い換えれば、表現者による単一の表現から、受容者によって理解される「表現者が意図した表現内容」は、仮に、受容者がその表現者による表現内容を自らの意識に復元することに最大限努めたとしても、その具体的規定に関しては、本質的に、多義的になる余地が残されることにならざるを得ないのである。この源泉は、表現者の生きられた世界と、受容者の生きられた世界との、相違による、と言ってもよい。あるいは、表現者と受容者の視点性の相違による、と言ってもよいであろう。

さらに、言語による叙事的描写を、その表現を位置づける多元的世界の多様さに応じて、多様な比喻として理解する可能性が、受容者には、残されている。そのことで、そこにも、必然的に、多義性の可能性が生じる。

以上は、「意味の回想の解釈学」においてさえも生じうる多義性である。

さらに、加えて、ある表現が、その裏に、あるいは、その底に、隠された意味を、そして時には、表現者自身にさえ隠されていて気づかれていない意味を、秘めているとする理解と解釈についての考え方からすれば、多義性は、受容者にとって、あらゆる表現に秘められている可能性がある、ということになる。例えば、『星の王子さま』（サンテクジュペリ）に関する、塚崎幹夫による解釈は、そのよい事例である。

さて、以上は、「疑惑の解釈学」（P.リクールの指摘する、ニーチェ、フロイト、マルクスの解釈学）において生じうる多義性である。

さらに、多義性は、受容者の表現理解における動機や欲望のあり方によって生じる。言い換えれば、受容者が与えられた表現を理解することによって満たそうとしている動機や、その表現によって満たそうとしている欲望の在り方によっても、多種多様な理解が発生する可能性があり、そこに、多義性の発生源がある。少なくとも、多義性

には以上のような多様な源泉を考えることができる。

第三の観察者の側における理解と解釈の多義性に関しては、観察者が生きている世界と、表現者と受容者が生きている世界との相互的差異により、多様性の増幅が起こりうるにせよ、原理的には、第二の受容者における多義性の源泉と、基本的に同様である、と考えられる。

玉虫色表現行為の構造と意味

さて、この段階で、玉虫色表現行為を考察し解明するための、基本的な枠組を考えておきたい。それは、玉虫色表現に関わる、基本的に、四種類の人間たちを考えることになる。すなわち、第一に、「玉虫色表現」の表現者、あるいは、送り手である。第二に、その受容者、あるいは、受け手である。そして、第三に、玉虫色表現が、表現者・送り手から送り出され、受容者・受け手によって、多様に理解されるという出来事を観察する観察者・傍観者・眺め手である。そして、第四に、そのような上記三者によって営まれる「玉虫色表現」の表現と受容という出来事の総体を、それぞれの視点・立場への同化と異化を通して、洞察を深める玉虫色表現の理解者・解釈者である。この論考の筆者は、いわば、第四の立場を採る。

玉虫色表現は、第一に、いずれ玉虫色表現であることになるはずの或る表現が、表現者・送り手によって、表現される、という出来事によって、成立する。それを、表現者・送り手の視点・立場から見ると、その出来事は、自らが、何らかの動機に促されて、送り手に向けて、その或る表現を送り出すという行為を起こす、という活動あるいは過程として経験される。ここで、表出に、表現と流露の区別を導入しておこう。表現者が、その表現を意識的に、意図的に、能動的に、表現しようとし表現した場合には、それは「表現」である。しかし、表現者は、無意識的に、無意図的に、受動的に、つまり、表現する意図を欠いたまま、しかし、表出されてしまうとき、その表出を「流露」と名づける。表現者の立場から言えば、「流露」を意識的に、意図的に、能動的に、表現しようとすることは、流露の定義によって、在り得ない。かつて流露であったものを、意識的に、意図的に、能動的に表出するとき、それは、もはや「流露」ではなく、「表現」となっているのである。また、一つの表出の中に、表現的要素と流露的要素が併存するとも考えられる。すなわち、表現者が表現することを意識的に意図した内容だけでなく、表現することを意図しなかった内容が、表現には含まれると言う意味で、両者の併存が指摘されるのである。

さて、第二に、受容者・受け手は、表現者による表現を、それとして受容し、受け取る。その際、表現者によって意図された意味を受容しようと思図する。しかし、それだけに留まらず、表現者が意図しなかった意味の可能性にも気づくことがある。そこに、玉虫色表現の発生の発端がある。さらに、表現者の意図した意味が受容されず、意図しなかった意味だけが受容される場合も起こりうる。もちろん、それは、受容者においては、表現者の意図しなかった意味ではなくて、意図した意味として、受容されるのである。この場合に、誤解が生じる。表現に意図された意味と表現から受容された意味とのずれ、錯誤は、程度の差こそあれ、表現と受容においては、常に、起こっていることである。こうしてみると、玉虫色表現という行為は、コミュニケーションにおける誤解の発生という出来事とも、関連が深いことが、分かる。「玉虫色表現」が、玉虫色表現として成立するためには、受容者・受け手において、表現の多義性が成立しなければならない。仮に極端な場合、表現者としては玉虫色表現を表出した積もりでも、単数あるいは複数の受容者の誰によっても、その多義性が受容されない場合は、その表現は玉虫色表現としては機能しない。その意味で、玉虫色表現の成立を決定するのは、表現者であるというよりは、むしろ、受容者である、とさえ言えるのである。

第三に、玉虫色表現の表現者による表出と、それを玉虫色表現として受容する受容

者による受容という出来事を、第三者として、傍観し、観察し、眺める立場・見方・視点を採る観察者・傍観者・眺め手 (observer/looker-on/viewer)、つまり非当事者、にとつての出来事の意味を考えることが出来る。眺め手は、少なくとも当事者のような強い利害関係は持たない。そこで、眺めているその出来事を中心にある「玉虫色表現」を、一定の距離を保って、眺めることができる。このことは、当事者ほど背景となる事情を知らないという不利はもちろんがあるが、自由に想像して、玉虫色表現の意味の可能性を読み取ることが出来るという有利もある。もちろん、ここには、眺め手の、読み取りの能力、想像力の豊かさあるいは貧しさが関わってくる。しかし、例えば、その有利さを活かせる場合には、利害に囚われて解釈の自由を失っている当事者の表現者と受容者の間に立って、当の玉虫色表現の意味の可能性と表現と受容の可能性を解き明かすことにより、当事者間の争から和に向けての調停役を果たすことが出来る可能性が生じる。

第四に、以上の、表現者、受容者、観察者の間で起こる「玉虫色表現」を巡る出来事の意味と構造を解明する第四の登場人物は、直接の当事者である表現者、受容者、観察者のそれぞれと同化したり異化したりしながら、その出来事の総体の意味と構造を明らかにする理解者、解釈者である。第四の人物によって、そこで、明らかにされた玉虫色表現の意味と構造は、さらに、将来の表現者、受容者、観察者がそれを理解するとき、玉虫色の出来事を、それぞれの生活世界において、それぞれにとって、望ましい方向に活かす可能性を、増大させる。そして、「玉虫色表現」を巡る出来事は、その意味と構造を変化させる。そのように変化した出来事の意味と構造を解明する仕事は、さらに継続し、その継続によって、「玉虫色表現」を巡る出来事の質は変化して行く。その変化は、玉虫色表現の人間社会にとつてもつ意味を変化させて行く。

この論考の筆者である私は、以上の枠組の中でいえば、第四の理解者、解釈者、解り手の役割を引き受け、その果たすべき課題を果たそうと、「玉虫色表現」の表現行為の意味と構造を解明することを目指している、ということになる。

玉虫色表現の発生：事例としての1) 沈黙と 2) 「どうも…」に即して

玉虫色表現はどのようにして発生するのであろうか。この場合、「発生」には、二つの場合がありうる。一つは、ある表現が、玉虫色表現であるとは、表現者を含めて、誰にも思われていなかったのに、ある切っ掛けで、玉虫色表現に変化する、玉虫色表現としての機能を果たすようになる、あるいは、玉虫色表現を欲望する動機を満たすようになる、という、既存の或る表現の玉虫色化という場合である。

もう一つは、何らかの表現をしようとするときに、玉虫色に表現しようとして、玉虫色表現を工夫して、それとして表現する、という未存の表現の玉虫色化という場合である。これは、玉虫色表現の創造とも言える場合である。玉虫色表現の展開としては、既に、高度に洗練された段階である。

なお、玉虫色表現の使用という点に限って言えば、第三の場合もある。それは、既に玉虫色表現として広く認められている定型的な玉虫色表現を、それとして、意識的に、意図的に用いる場合である。玉虫色表現の慣習化の段階である。例えば、玉虫色表現「どうも…」は、多くの場合、そのような表現として、用いられている、と考えられる。

ここでは、真正の発生の場合として、第一の場合、つまり、既存表現の玉虫色化を考える。そして、事例としては、主として、沈黙と「どうも…」を取り上げる。

既存の表現の玉虫色化は、どのようにして起こりうるのであろうか。表現者が何らかの表現を、ある意味を込めて表出する。最初は、表現者としては、自らが表現しようとした意味にしか思い及んでいない。しかし、あるとき、その同じ表現が、受容者によって、表現者が意図した意味とは別の意味に理解されていることを知る。そして、

その理解の仕方が、表現者にとって望ましくない場合は、受容者の理解を否定して、あるいは、表現者として望んでいた理解を正しい理解として示すことで、受容者の理解を正そうとするであろう。ところが、仮に、受容者のその別の理解が、表現者にとっても、特に不都合は無いと感じられる場合、あるいは、そのように理解されたほうが、かえって、より望ましいと感じられる場合、表現者は、受容者のその別の理解を正そうとはしないかもしれない。そこで、その表現は、玉虫色表現に変化する。「そこで」とは、受容者の理解した意味内容が、表現者の意図した意味内容とは異なること、つまり、いわば受容者による「誤解」に表現者が気づいた時点で、その気づきにも関わらず、その「誤解」を表現者が正そうとしないで、そのまま放置することを決めた時点である。ここでは、観察者の視点からすると、表現者の意図した通りの意味内容をそのままに受容する受容者も可能である、と同時に、同じ表現から、「誤解」に基づく意味内容を、受容する受容者が現れていることになる。従って、少なくとも、表現者によるその表現は、受容者の見方・視点・立場によって、二つの異なる意味内容に理解されうる表現となっている、つまり、玉虫色表現となっていることになる。しかも、表現者の立場からみても、当初、表現者が意図した意味内容と、「誤解」によって受容された意味内容とも、共に許容できる意味内容である、という点が肝要である。「許容できる」ということは、当初意図した意味内容が「許容できる」ことは当然として、さらに、表現者が、「誤解」を正そうとしないということにも現れており、誤解を正さなかった時点で、少なくとも、表現者にとって、その表現は、意図された意味内容と、誤解から生じた意味内容とを共に、二つの意味内容を含む玉虫色表現として、成立したことになる。

ここで、玉虫色表現化においてその発生を支えた「誤解」に対して、表現者が、否定あるいは抗議などの表明をするかあるいはしないかが、玉虫色化においては、決定的であることが露わとなってくる。

「誤解」に対する否定あるいは抗議は、実は、もし洞察力に富んだ表現者であれば、あらかじめ、その可能性を排除しておくことが出来たかもしれない。それは、そのような「誤解」の可能性を予期して、その誤解が生じないように、表現の多義性を限定する努力、あるいは、限りなく一義的にする推敲の努力を払うことによって可能となるであろう。例えば、論文執筆の場合、推敲の目的は、文章を美しく、わかり易く、論理的にする、整理する、などなどのためだけではなくて、文章の多義性を縮小して、可能な限り一義的にすることにある、と考えられる。言い換えれば、その目的は、多義性の排除、玉虫色からの脱出にある、とも言えるだろう。否定による多義性の排除は、多義性から生じうるさまざまな誤解の可能性を予見して、その予見される可能な誤解の主たるものを明示化し、その予め明示化された誤解を否定することにより、為されうる。

その意味では、ある表現の玉虫色化とは、多義性による誤解の許容ということから生まれる、と言ってもよかろう。逆に言えば、ある表現に多義性、二義性がある限り、一義的表現を目指す表現者にとっては、誤解される可能性は、常に潜在しており、そこに発生した、表現者の立場から見た場合の、「誤解」は、表現者がその誤解を許容する限りにおいて、言い換えれば、その「誤解」を正すことに表現者が努めない限り、その表現は玉虫色化することになる。しかし、上記のように、この「誤解」を正すという行為は、誤解の可能性を予見することに失敗したことを表しており、いわば、「後追いの推敲」という性格をもつ。しかし、人間には、総てを予見することは不可能であることも認めなければならない。もっとも、仮に、表現者が、その誤解を正そうと努めても、その表現からは誤解が生じたという限りにおいて、表現者による誤解訂正の努力の存否に拘わらず、その表現は多義的であり、玉虫色表現でありうるし、そして、そのことが、発見されたことになる。ここに、玉虫色表現が発生する。

例えば、**沈黙**という表現。沈黙は、最大限に多義的な表現である。「沈黙」として

性格付けられる多種多様な行為は、ある見方からすれば、何も表現していないことがその共通性である。しかし、実は、一つ一つの沈黙は、その沈黙を守る人間の在り様によって、その置かれた状況によって、多種多様な意味内容の表現となる。そして、その表現としての意味は、その表現者の経験内容を偽らない。なぜなら、何らかの表現をすることによって、その表現が、表現者の経験内容を裏切ることが在りうるのに対して、沈黙は、何も表現しない限りにおいて、表現者の経験内容を裏切ることが出来ない。もちろん、沈黙に伴う、笑顔、怒った顔、泣き顔、楽しげな顔など、沈黙の意味を表現する表情はある。それらが、経験内容を裏切ることが、ありうる。例えば、悲しみを隠した笑顔、怒りを抑えた平静な表情など、がそれである。しかし、沈黙そのものは、沈黙を守る限り、経験者の経験内容を偽ることができない。

とはいえ、沈黙が無内容である、と考えるのは誤りであろう。多種多様な沈黙がある。

例えば、善意に満ちた沈黙、悪意に満ちた沈黙、深い悲しみに言葉を失った沈黙、憂いに満ちた沈黙、溢れる喜びを抑えている沈黙、深い喜びが言葉にならない沈黙、饒舌を意識的に抑えた沈黙、憤激を抑えた沈黙、憎しみを込めた沈黙、堅い決意を秘めた沈黙、優しさに満ちた沈黙、好意の眼差しを包んだ沈黙、愛情の溢れた沈黙、軽い戸惑いの沈黙、思考に集中している沈黙、などなど、同じ「沈黙」にも、無数の種類があり、まさに、千差万別である。

しかし、これらの沈黙の意味を「読み取る」のは、沈黙の表現者ではなくて、沈黙の受容者である。そして、観察者である。しかし、その意味の読み取りには、受容者の読み取りの力が直接に反映する。その読み取りは、極めて複雑で、困難である。読み取りには、その沈黙と言う表現が置かれている状況、その表現者の生きられた世界への洞察、その生きられた世界におけるその状況の意味、自らの読み取り能力への妥当な理解、などなどが、総て関わっている。その状況において、表現の「誤解」の可能性は、沈黙において、最大となる。例えば、饒舌を無理に意識的に抑えている沈黙、あるいは、決意を秘めた沈黙を、憎しみを込めた沈黙と「誤解」する受容者を考えることは、比較的容易であろう。沈黙の意味内容の読み取りが、受容者に委ねられていて、しかも、沈黙は多義的であり、受容者の沈黙の意味内容を読み取る力は、受容者により差が大きいという条件から、沈黙は、玉虫色表現となりがちである。しかも、さらに、そのことに表現者が、そのことに気づくなら、沈黙を、意識的に玉虫色表現として用いることが可能となる。それは、自らは沈黙を守りつつ、その意味内容の読み取り解釈は、ひとり一人の受容者に任せるという在り方を、表現者が採ることを意味する。そこに、意識的で、意図的で、能動的な玉虫色表現としての「沈黙」が発生しうる。

次に、例えば、「どうも…」という表現。この日本語表現は、極めて多義的である。しかも、その意味は、その表現が表出された状況に直接に依存しており、受容者によって理解されることが期待されている。しかも、その理解は、受容者のいわば責任において為される。したがって、仮に、受容者が、この表現を聞いて、何らかの理解をして、怒り出したとする。すると、多くの場合、それは、「どうも…」と言った表現者の責任であるというよりは、その表現を聞いて怒り出すような理解をした受容者の責任である、とされるであろう。なぜなら、表現者は、無数の意味内容を可能性として秘めた「どうも…」という表現しかしておらず、いつでも、受容者が怒り出すに足るような意味内容をそこには込めていない、ということが可能だからである。理解内容に対する責任は、総て受容者にあるとも言える表現なのである。その意味で、この玉虫色表現は、沈黙に似てもいる。しかも、沈黙よりも、表現者の表現への意志を表明している点で、沈黙の多義性を最大限に効果的に活かす表現である、ともいえるであろう。

さて、ちなみに、日常的な状況で、「どうも…」が、表現しうる意味内容を、明示化することを、試みてみよう。

友人に数日振りに出会って、明るい声で「どうも…」と言う場合：「やあ、元気かい」、「どうだね、調子は」、「また、会えて嬉しいよ」、「先日は、有難う」、などを意味しうる。

葬儀で喪主に挨拶するとき、沈んだ声で「どうも…」と言う場合。：「お悔やみ申しあげます」、「悲しく思います」、「驚きに言葉ありません」、「あの人を失って、残念でなりません」、などを意味しうる。

何事かを他者にしてもらって、その他者に感謝の意を表すべき場面で、「どうも…」と言う場合：「有難う」、「たいへん有難う」、「感謝します」、「嬉しくて、言葉ありません」、などを意味しうる。

他者の座っている席の前を通るために、その他者に脚を引いてもらう時、「どうも…」と言う場合：「ご迷惑、ご面倒、をお掛けして、すみません」、「脚を引っ込めてくれて、有難う」、「通してくれて、有難う」、「前を通って、ご免なさい」などを意味しうる。そして、

他者の好意の贈り物を受け取る時、「どうも…」と言う場合：「このような心遣いをしてくださって、感謝の言葉ありません」、「有難う」、「とても嬉しく思います」などを意味しうる。

まだまだ考えられるが、ここで、止めておく。「どうも」は、これら無数の、状況に応じて表現されるべき言葉の導入になる言葉であり、「どうも…」は、「…」によって表現されるべき言葉を、沈黙によって代用することにより、受容者に沈黙の意味を読み取ることを委ねる表現なのである。その意味で、典型的な玉虫色表現である。受容者がその意味を読み取る、解釈する、あるいは、意味付与するのであるから、少なくとも、表面的には、「誤解」は生じない。仮に、表現者が先にその意味内容を明示的に言えば、それは、受容者が期待する内容とは異なる場合を生じるかもしれない。しかし、表現者はその沈黙に込めた意味内容を明示化していないのであるから、受容者の理解あるいは意味賦与との差異があるかどうかは、明示化されない。そして、互いに、そこに込めた意味内容の確認をしようとしてもしない限り、仮に超越的な視点からは、「誤解」が生じていたとしても、それは表面化しないので、争いにもならない、ということになる。また、その誤解に対しては、少なくとも、表現者は責任を負わず済むのである。

また、ここには、日本において、沈黙が、「言葉を越えた気持を表現する」表現として、認められ、時には、言葉よりも、尊重されるという事情が、隠されているようにさえも、思われる。

それにしても、「どうも…」なる表現の多義性に、その明示化を試みて、改めて驚いた。外国人に日本語をお教えするときには、最初に、「どうも…」を、その時々々の気持を込めて言うことを、お教えすれば、日本人とのコミュニケーションに最も役立つ大変便利な表現をお教えしたことになるかもしれない。

玉虫色表現の展開

つぎに、玉虫色表現のさまざまな段階を、やや図式的に展開することを試みてみる。これは、表現者と受容者それぞれの立場・視点・見方と同化と異化を繰り返しながら、観察者の立場・視点・見方を採りつつも、さらに、それを越えて、超越的な立場・視点・見方を採って、玉虫色表現行為が、人間と人間の間で、どのように展開しているかを、想像してみるものである。その展開の道筋は、決して一直線ではない。しかし、ともかく、その展開の経路を追ってみよう。

表現者Xの表現を、表現者自身が「玉虫色」とであると、気づき、意識し、意図している場合と、そのようには意図していない場合とを、(1,0)と表現してみる。すなわち、Xの「玉虫色表現」に関する意識の水準を、極めて単純化して、不連続化し、1と0で、デジタルに表現することを、試みるのである。同様に、受容者Yが、表現者の表現を「玉虫色」とであると、気づき、意識し、意図していると理解し、解釈している場合と、そのようには理解も解釈もしていない場合とを、(1,0)と表現してみる。そして、同様に、観察者Zが、表現者の表現を「玉虫色」とであると理解して居る場合と、そうではない場合とを、(1,0)と表現してみる。

すると、三者の状態についての場合の組合せは、次のようになる。

Case#	X	Y	Z
1	0	0	0
2	0	0	1
3	0	1	0
4	0	1	1
5	1	0	0
6	1	0	1
7	1	1	0
8	1	1	1

ここで、三者の状態の組合せにこれだけの場合がありうるということがわかる。しかし、これらCasesの総てを、具体的に詳細に展開する余裕はない。その意味について簡単に言及するに留める。

例えば、Case 1 は、X, Y, Z, の三者の総てが、「玉虫色表現」について素朴で、未だ、気づきが生まれていない場合であろう。例えば、幼児Xの表現を、幼児Yが受容し、それを幼児Zが観察しているような場合を想像することができよう。ここでは、容易に誤解が発生して、子どもらしい喧嘩が生まれるかもしれない。

Case 2 は、Case 1 に多少の変化が起こった場合で、観察者Zが、例えば、児童心理学者であって、幼児であるXとYの間で、素朴な表現と受容とが行われているのを、観察しているような場合を想像できる。この場合、X の意図、目的、意識の有無にかかわらず、如何なる表現にも内在する多義性によって、観察者Zは、既に多義性の可能性に気づいており、意識している。それに対して、表現者Xも受容者Y も、多義性の可能性に気づいていないために、両者の間には、何らかの誤解が生じる可能性が大きい。しかも、その誤解の可能性に、両者は気づくことが出来ない。そのような場合は、第三者である観察者・傍観者は、その視点の柔軟性により、両者の誤解を解く役割を担う可能性をもつことになる場合を考えることができよう。

Case 3 は、受容者が、「玉虫色表現」の多義性に関する理解において、孤立無援の状態を表している、と考えられる。この場合、表現者Xの「玉虫色表現」は、確かに多義的ではあるが、無意図的な、無意識的であるために、表現者自身も、その多義性、多様な解釈の可能性に気づいていない場合である。受容者Yは、その多義性の解釈において、表現者にも観察者Zにも、理解を求めることが出来ないという場合、「孤立無援」となる。表現者と観察者に、多義性の理解を求めて、理解を耕して行く苦勞を担って行かなくてはならない。

Case 4 は、多義性の可能性の理解を、受容者と観察者のみが、有していて、表現者が有していない場合である。カウンセラーYとそのスーパーヴァイザーZとが、表現の多義性の可能性を前提としつつ、素朴な素人患者Xの表現の理解に努めるという場合を考えることができる。

Case 5以降は、表現者X自身が、自らの表現を含めて、表現の多義性に気づき、意識的に、また、意図的に、自らの表現に多義性を活かす場合である。Case 5では、受容者も観察者も、玉虫色表現を意識していない。そのため、「玉虫色表現」は、その機能を十分に発揮しやすい。が、しかし、その後、受容者あるいは観察者が気づき、意識化するに至ることにより、その効果にも、変化が起こる可能性があることを意味する。Case 6 と Case 7は、そうした変化が、起こった場合と、考えることも出来る。

Case 6 では、表現者X だけでなく、観察者Z も気づいている場合で、受容者のみが、素朴に、一義的に理解している場合である。ここで、表現者X の「玉虫色表現」の動機が何であるかによって、また、観察者がそれをどのように理解するかによって、三者の関係は、微妙に変化して行くであろう。それは、Case 8において、たとえば、三者の間に爆笑あるいは哄笑が生まれるか、あるいは、さらに、疑惑と憎悪が生まれるか、の相違を生むことであろう。

Case 7 では、表現者X と 受容者Z において「玉虫色表現」に気づいているのだが、観察者Z が気づいていない場合である。観察者Z の気づきが生まれ、Case 8に移行するとき、観察者Zにとっては発見が起こる。その発見と表現者Xと受容者Yへの伝達が、「玉虫色表現」の動機と洗練度の水準の上昇に結びつくかどうかは、多様であろう。

終わりに、Case 8は、表現者、受容者、観察者の三者ともが、「玉虫色表現」に関して、それぞれに、既に表現の多義性に関して気づいており、意識的であり、意図的である状態に到達している状態の場合である。いわば、8つの場合の中では、三者ともが、最も洗練された(sophisticated)状態に到達している場合である。例えば、外交交渉において、当事者である二つの国の政府代表者である洗練された外交官が、それぞれの母国の利害と世論と、相手国の利害と世論に配慮して、また、相手国外交官の立場にも配慮して、しかし、同様の自分の立場も相手が配慮することを求めつつ、利害が対立する双方の国の世論を満足させつつ、しかも、何らかの協定を締結する必要に迫られて、両者の相互理解の上で、「玉虫色の協定」を結ぶ。それを、同様に洗練された第三国の外交官が、観察者として、「その協定は玉虫色だ」と批評する、という状況を、その一つの具体例として、考えることができよう。

解明すべきCase としては、最も複雑で、しかも興味深い場合である。

以上は、いわば、多種多様な場合の、8種の状態それぞれの静態的な解明である、と言える。これらの場合については、さらに、お互いの間での、動的な相互移行を考えることができる。そして、それこそが、「玉虫色表現の展開」という表題により相応しいであろう。

各ケースの番号を用いて、相互に可能な移行関係を図示すると、以下のようになる。

Case#	X	Y	Z
1	0	0	0
2	0	0	1
3	0	1	0
4	0	1	1
5	1	0	0
6	1	0	1
7	1	1	0
8	1	1	1

Transitions between cases : $P = 8! / (8-2)! = 56$

Figure The cube of 8 case-corners with 5 6 transitions.

すなわち、上記の8状態の相互間の移行には、5 6通りもの可能性がある。で、その総て移行運動をここで、詳細に展開することは出来ない。しかし、現実状態の変化過程の軌跡を、現実性としても可能性としても、この立方体上に描くことが出来るようになったことになる。ここで、X, Y, Zが、その意識において正常な状態の場合には、「玉虫色表現」への気づき、意識、意図は、一旦成立するなら消えることはない、と考えられるなら、状態間の相互移行は、双方向的ではなく一方向的となるであろう。その場合は、移行の場合の数は、2 8通りとなる。しかし、X, Y, Zの意識が病的な状態にある場合には、例えば、健忘症、アルツハイマー症の出現などの場合には、状態間の相互移行に双方向性が現われる。で、正常状態の場合には、例えば、(2→1)、(3→2)などは無い。その場合は、2 8通り。しかし、病的状態の場合には、それらも有り得るであろう。その場合は、5 6通り、となる。

また、ここで用いた(1, 0)の表記は、「玉虫色表現」という出来事そのものへの気づき、意識、意図、目的などに関する表記としても、あるいはまた、限定された特定の「玉虫色表現」への気づき、意識、意図、目的に関する表記としても、用いることが可能である。ここにも、多義性が現れていると考えるなら、この表記そのものも、「玉虫色表現」である、と言えるかもしれない。これは、集合論における、集合と要素の両方に適用可能な表現の両義性と似てもいる。

もちろん、この軌跡は、上記のような、二状態間の移行の軌跡としての2 8通りあるいは5 6通りの移行に限られず、それらを2重にも三重にも重ねた移行を考えることが出来るので、これらの移行軌跡の可能性は、その数において、倍加する。例えば、ただ単に、(1→2)という軌跡に留まらず、(1→2→4→8)という、発達あるいは発展の軌跡を、立方体図の上に描くことができることになる。

そうした一つの移行の軌跡に対応する場合を、具体的に想像して描いてみよう。

まず、最初は、Xが、総ての表現に秘められた多義性に気づかない段階である。この段階で、YもZも、未だ、気づいていないとしよう。つまり、状態1の(0, 0, 0)の場合である。そこから、一つの軌跡が始動する。

まず、(1→5)の移行の軌跡を考える。或る人物Xが、例えば、或る場面で、「どうも・・・」という玉虫色表現を用いたとする。仮に、Xとしては、「どうも、失礼します。」という意味を込めて表現したと仮定しよう。しかし、Xがその表現を宛てたYは、それを「どうも、有難う」の意味に受け取ったことが、後になって解ったとする。そして、その場に同席していたYに、Yはどう理解したかを尋ねる。すると、Yは、Xが意図した「どうも、失礼します」の意味に理解していたことが解ったとする。すると、そこで、Xは、表現「どうも」に両義性があることに気づくことになる。表現「どうも」の両義性に気づいたのである。つぎに、Xが、受容者Y(1)とY(2)に、表現「どうも」を用いるとき、Xは、この表現の少なくとも、二つの意味の可能性に配慮することになる。

のみならず、さまざまな表現にも、ちょうど「どうも」の場合と同様の両義性、あるいは、多義性の可能性があることに気づき始める段階がやって来る。その経過は、「徐々に」である場合もあれば、「急激に」である場合もあろう。そのことに気づくと、時には、一定の表現の多義性を、例えば「どうも」の多義性の可能性を、意図的かつ消極的に活かす段階が現れるであろう。この場合、妥当するのは、(1→5)、すなわち、(0, 0, 0)から(1, 0, 0)への移行ばかりではなく、(5→6)、(5→7)あるいは、(5→8)などの移行においても、そのことは、妥当するであ

ろう。

そして、次には、表現者Xが、「玉虫色表現」の多義性の可能性を意図的かつ積極的に活かす段階がやって来る。表現者は、複数の受容者たちが、その「玉虫色」表現を多種多様に受容するであろうことを予期している。その上で、受容者たちが、それぞれの視点・立場に応じて、受容することを予想し、表現者Xは、受容者たちに向けた表現を、意図的・意識的・目的的に、多義的に表現し、「玉虫色表現」とする。その「玉虫色表現」は、それぞれの受容者の多種多様な理解を可能とする表現である。しかも、それと同時に、各受容者の理解の仕方によって、それぞれが、その表現内容を、肯定的に受容できると感じさせることのできるように、表現されている、そのような「玉虫色表現」となっている。以上のような状況を、表現者Xが、意図的・意識的・目的的に、多義的に表現し、「玉虫色表現」とすることによって、作り出すのが、この段階である。

次に、表現を多義的に受容させるのは、受容者によって、その表現によって満たそうとする動機が異なることにもよる。それぞれの受容者の欲望が多種多様だからである。そこで、次に、受容者たちの動機と欲望の多様性に気づく段階に続いて、その多様性を活かして、それに応える「玉虫色表現」を意図的・意識的・目的的に表現する段階がやって来る。これは、Cases: 5, 6, 7, 8. のいずれにおいても、成立しうる。前述のように、多義性は、受容者の表現理解における動機や欲望のあり方によっても生じる。このことを考慮に入れるなら、表現者Xは、単に、表現形式を玉虫色とするだけでなく、さらに、その表現理解によって満たされうる多種多様な動機あるいは欲望を、多様な仕方で満足させるように、表現を「玉虫色」とすることに配慮するということが、可能性として現れて来るのである。

もちろん、状態5 (1, 0, 0) におけるこの段階と、状態8 (1, 1, 1) におけるこの段階とでは、その洗練の水準が異なるであろう。

状態5においては、受容者(たち)も観察者も、玉虫色表現に気づかずに、いわば「騙される」。それに対して、状態8においては、表現者、受容者、観察者の三者が、ともに、「玉虫色表現」の多義性に気づきながらも、それを受容し、相互承認する場合であるからである。この段階の具体的事例には、極めて高度で洗練された外交交渉における「玉虫色の協定」とか、高度に政治的に葛藤の緊張度の高い状況における一国の首相の「玉虫色の発言」などが、考えられる。

日本の或る首相(大平正芳首相、在任期間: 1978-1980)は、若い時は、極めて明晰な論理で弁舌爽やかな政治家であった、と伝えられている。しかし、最晩年、首相となってからは、明確な発言はきわめて少なくなり、多くの場合、「あー、うー」という曖昧な表現で、時間を費やすことが多かった。これは、私の解釈では、多種多様な利害、つまり動機と欲望、が対立する困難な状況で、その最終的決定権をもつ首相として、避けることの困難な、あるいは積極的に活かした「玉虫色表現」であったのではないか、と思われる。少なくとも、その状況で、立場の鮮明な発言をすることが困難であった、あるいは、鮮明な発言を避けた、その結果が、「あー、うー、あー、うー」という玉虫色表現であったのではないか、と私には思われるのである。

以上のように考えてくると、「玉虫色表現」は、極めて広い広い社会的視野を地平に秘めている可能性が見えて来る。それは、多種多様な受容者と観察者における、多種多様な理解と解釈を予期しつつ、そこに、表現者の立場から見て、最も望ましい受容と解釈を生み出す表現を求めるとき、「玉虫色表現」が生成される、ということになる。

もっとも、「玉虫色表現」の多種多様な受容者・観察者による理解・解釈は、時には、表現者の予期を越える場合もあるであろう。そのような場合、予期を超えた理解・解釈に気づくことは、表現者のその後の表現に、変化をもたらすであろうことは、表

現一般の変化の過程と同じである、と言ってよいであろう。

とりわけ興味深いのは、内部集団（例えば、味方）と外部集団（例えば、敵方）の両方に向けてある表現を提出する場合、しかも、両方の集団を共に満足させなければならないという苦境に表現者が置かれている場合に発生する「玉虫色表現」である。これは、同様の苦境に置かれている、外部集団（例えば、敵方）所属の表現者によっても、同様の働きを果たす「玉虫色表現」が求められることになる。そこで、両者の相互承認を経て、どちらの集団にとっても、それなりの満足をもたらす「玉虫色表現」が、例えば、「協定」として、採用されることになるであろう。もちろん、これは、両者の力関係によって、その「玉虫色」の程度は、さまざまに変化するであろうが。そこには、味方の仲間たちにも評価される要素が必要である。「玉虫色表現」は、一方で自ら味方の立場を相手に認めさせた、という証しとなる。他方で、敵方にも、同様の評価を、敵方の仲間たちに認めさせる余地を、相手方の表現者にも提供しなくてはならない。それなくして、相互承認は成立しない。さらに、相手の立場を認める度量を示した、と勝ち負けにこだわらない人物として、その人間性が評価されることも在ってもよい。いずれにせよ、自分（味方）の仲間と相手（敵方）の仲間と、両方への配慮が「玉虫色表現」に込められることになる。

これに関係しては、法学者末弘巖太郎によって指摘されている、英米法における「名義上の損害賠償」（nominal damages）（nominal compensation for damage?）の考え方は、「玉虫色表現」同じ役割を果たす、ということも言える。すなわち、民法上の訴訟において、原告と被告の双方の、それぞれの面子、名誉を保ち、しかも、それぞれに不満を残さないようにすることを可能にする方法として、共通する性格をもつ、とも思われるのである。

玉虫色表現の受動性と能動性

一つの物事、思想、経験を表現するにも、多様な表現が可能である。その多様性が発生する根源には、表現する人間の経験の視点性、時間性、空間性、社会性、歴史性、個人性、身体性、言語性（国語、階級語、世代語など、職業語、隠語などなど）、イメージ性、・・・などがある。

現象学と解釈学は、そのようにして発生した多様な表現の意味と構造を解明する。そのような解明によって、多様な表現の意味と構造が明らかになることによって、あることが可能となる。

それは、解明によって明示化された意味と構造を、逆に、黙示化、含意化する、ということである。

「玉虫色表現」の最も洗練された種類のものには、その成立の基盤に、この黙示化の働きがある。しかし、総ての「玉虫色表現」が、この黙示化を前提としているわけではない。如何なる種類の表現においてもそうであるように、「玉虫色表現」にも、幼稚で拙劣なものから、成熟した精妙なものまでであることは、先述の通りである。

そこで、「玉虫色表現」を生成する表現者の活動に、受動的と能動的の両方の場合があることを、指摘しておかなくてはならない。すなわち、一方には、「玉虫色表現」を用いることなど全く意図せず、意識せず、目的ともしていない場合がある。たまたま、或る表現を用いたところ、他者からそれが「玉虫色表現」である、あるいは、そのようになっている、と指摘され、あるいは、そのように理解・解釈され、表現者自身が、その表現が「玉虫色」となっていることに初めて気づき、そのことに驚く、という場合が、一方にあるであろう。これを、受動的である一方の極とする。すると、他方には、表現者が、さまざまな状況、例えば、受容者、観察者などなどの、それぞれの視点、生きられた世界、その理解と解釈の可能性、・・・などを解明し、それらを十分

に意識化し、表現に当たって、その諸状況に配慮して、能動的に、積極的に、意識的に、意図的に、目的をもって、表現者が望む理解と解釈を受容者に惹き起こすために、「玉虫色表現」を、敢えて、精妙に創造する、という場合が他方にあるであろう。これは、いわば「確信犯」である場合である。これを、能動的である他方の極とする。総ての「玉虫色表現」は、この両極の間に位置するであろう。

ところで、受動的な「玉虫色表現」の場合、他者からその表現が「玉虫色」であることを指摘されたとき、表現者はどうするか。一方では、その「玉虫色」の「脱玉虫色化」を図る場合が考えられる。つまり、曖昧な表現を、明晰判明とすることに努める場合である。文章推敲の多くの場合は、こうした場合であろう。しかし、他方には、たとえ他者の指摘によって初めて、「玉虫色」であることに気づかされたとしても、そのことを改めることを望まず、そのまま「玉虫色表現」に留めておこうとする場合も考えられる。これは、そもそもは、受動的に「玉虫色表現」が生成される結果となったにせよ、気づいてみると、暗にそれを望んでいたのことに気づいて、そのままであることを容認するような場合である。受動性の極には、「玉虫色表現」であることに気づいた後に起こる、「脱玉虫色化」と「玉虫色容認」あるいは、さらに、「玉虫色強化」などの動きが考えられる。

では、能動的な「玉虫色表現」の場合は、どうであろうか。意図された本来の「玉虫色表現」は、他者によっては「玉虫色表現である」ことが気づかれない場合に、その目的を最も良く果たす段階がある。その場合は、恐らく、他者から「玉虫色である」と指摘されても、ただちにその「脱玉虫色化」を図ることは、しようとはしないであろう。おそらく、その指摘には、再び、「玉虫色表現」をもって、応えるであろう。こうして、能動的な「玉虫色表現」の表現者は、さらに「玉虫色表現」を——「玉虫色表現」であることを自認するか否かについて、また、元々の「玉虫色表現」を推敲するに当たって、——加えることによって、一層の「玉虫色強化」に向かうことになると思われる。

したがって、その玉虫色性を他者から指摘された場合に、「脱玉虫色化」の方向をとるか、あるいは、「玉虫色強化」の方向をとるか、によって、その玉虫色表現が、受動的であったか能動的であったか、について判断するための、ある手がかりが得られることにもなる。

玉虫色表現の動機

つぎに、玉虫色表現を用いる、あるいは、それが出現することになる、その背景にある表現者の動機について考えてみる。

ここで、多種多様な「玉虫色表現」の背景にある動機の種類を、その本質に即して解明するに当たって、仏教の小乗と大乘の区別が有効ではないか、という考えに突き当たった。そのことを、述べてみたい。

周知のように、仏教には、大乘（s : mahayana）と小乗（s : hinayana）の区別がある。「小乗教徒が自利にのみ走り、一般の在家信者を顧みない傾向が強かったのに対し、菩薩（仏陀のさとりを求める有情）たちはみずからが仏陀となることとともに、あるいはそれ以上に、あらゆる人々をさとらせ、救済しようとする慈悲を強調したから大乘という」（岩波『岩波 仏教辞典』p538）。

つまり、「玉虫色表現」には、自利のみしかない自己中心的な動機がその根底にある場合が一方の極にあり、他方の極には、自利のみならず他利も、さらには、それを超えて、他利のみを心底から望む脱自己中心化への動機がその根底にある場合が、考えられる、ということである。

そのことを、少し具体的に考えてみよう。

まず、「玉虫色表現」に、自利のみを求める、自己中心的な、小乗的な動機がその根底にある場合。

これが、「玉虫色表現」の評判を落としている用法であろう。たとえば、自らの動機の不純さ、あるいは、自利追求だけの動機を覆い隠すために、「玉虫色表現」を用いる場合。あるいは、受容者の目を、表現者にとって不利な点から逸らすために、用いる場合。自らの立場が鮮明になって、追い込まれることを避けるために、用いる場合。誰にでも気に入られるために用いる場合。などなど、が考えられる。それらに共通しているのは、それが、自利の動機の充足のみに向けられているという一点にある。

「玉虫色表現」に、自利を超えて、他利を望む、脱自己中心的な、大乘的な動機がその根底にある場合。

この場合は、表面的な違いは直ちには見えてこないために、小乗的な動機によるものと誤解される可能性がある。しかし、これは、その動機においても、また、「玉虫色表現」の洗練度においても、格段の相違がある。たとえば、ある協定を、立場を鮮明にして、明示的かつ明確な表現で表そうとした場合、それに、関係者の双方が合意することができず、極端な場合には、殺し合いになりかねないような、深刻な争いの可能性を秘めている場合。関係者の双方が合意できる「玉虫色表現」は、両者の殺し合いの争いを、とりあえずは、回避するための役割を果たすことが出来る。もし、そのような洗練された表現を創造できなければ、現実の悲劇を避けることが出来ないときに、表現者は、可能な争いの当事者である受容者の双方を、救うことになる。そのことの意味は、機能について論じる際に、さらに後述する。あるいは、もう一つ事例を挙げれば、複数の関係者が自己中心的で、自己の利益のみを考え、相手の立場への配慮に欠けていて、視野狭窄を起こしている場合、とりあえずは、両者が受容できる「玉虫色表現」で一旦合意をさせることにする。しばらくすると、両者が、相手の立場からも物事を見ることが出来るようになり、そのため、「玉虫色表現」を、相手の立場から理解し、解釈できるようになる。すると、ある段階では、関係者の双方は、「玉虫色表現」が相手に有利のようにも理解されうるとして、その表現の不備に不満を訴えるかもしれない。しかし、その段階を経ることで、関係者の双方は、次第に、自らの利のみを考え、相手の利を少しも考えていなかった自己の視野の狭さに気づくことにもなり得る。少なくとも、「玉虫色表現」を自己に都合のよい仕方で理解していた最初の段階から、他の理解の可能性に気づき、自己の理解の基盤にある自己中心性に気づき、さらには、自利と他利の双方を配慮できる段階に導かれる、という可能性も考えられる。すると、その「玉虫色表現」を創造した表現者は、利害の反した関係者双方の和解を目指してその表現を「玉虫色」としていたことも、関係者双方に理解され感謝されるに至るといった幸せな結果となる、場合も考えられる。この場合、表現者の動機は、利他が中心であって、自利ではない。ただし、以上のような挿話が可能なのは、おそらく、前述の展開の場合で言えば、Case 5 あるいは、Case 6 のような場合に限られるかも知れない。

以上のような場合が、考えられる。そして、「玉虫色表現」の動機に、自利と他利がありうるということが、明らかとなる。そのことは、その動機にも、さまざまな水準があり、一律ではない、ということである。

「玉虫色表現」の機能

「玉虫色表現」に可能な機能は、「玉虫色表現」で満たそうとする動機よりも、より多種多様で、範囲が広いと考えられる。それは、機能が、表現者によって気づかれ、その機能を自らの動機の達成に用いようとするとき初めて、現実の動機になるが、総ての機能が、そうした動機に移行するとは限らないと考えられるからである。たとえば、「玉虫色表現」がどのような機能を果たしうるか、その可能性の総てが、既に人間に知られている、とは言えない。そして、動機に生かされうるのは、既に知られ、意識されている「玉虫色表現」の機能に限られるであろうからである。ここでは、そ

ここで、動機とは一旦分離して、機能に限って、幾つかの可能性を、思いつくまま、考えてみよう。

私利、自利のために活かされている機能については、それへの非難、批判の広範さからも、恐らく、周知のことであろうと考えられるので、ここでは、省略することにする。

むしろ、他利、利他のために活かされうると考えられる機能を、挙げてみる。

「玉虫色表現」の機能として、次のようなものが考えられる。

- 1) 多様性を、一様性に強制することを、少なくとも一時的には、意識的に避ける。もし、仮に、紛争・葛藤・対立を調停する協定・合意を強いて一義的な表現にしようとするれば、関係者の多様性を一様性に強いて押し込めることになる可能性が生じる。「玉虫色表現」は、一時的にせよ、あるいは、少なくとも一時的には、そのような事態になることを、意識的に避けることを可能とする働きを果たす。
 - 2) 言い換えれば、多様性を、多様性のままに認める。紛争・葛藤・対立の関係当事者が、「洞察による共有」に到達できない場合、互いに共有できないことはそのままにして、互いに多様であることを、そのままに、認めあうこと。言い換えれば、「相互承認」を可能にする。
 - 3) 紛争・葛藤・対立の関係当事者たちに、考える時間の余裕を与える。「玉虫色表現」は、曖昧で多義的であるために、その受容者は、その意味を考えることを求められることになる。その意味を考えることは、自己の視点からのみでなく、可能な他者の視点からも、その表現の意味を理解・解釈することを意味する。そのための時間を、「玉虫色表現」は、その多義性の故に、受容者に与えてくれる。もちろん、それが起こるためには、表現者・受容者・観察者の三者の状態について、一定の条件が必要である。つまり、受容者が、玉虫色表現を一義的理解から多義的理解へと移行する可能性を残しているという条件である。
 - 4) 直ちに勝負を決すること、勝敗を明白にすることを、避けることを可能にする。つまり、決着を延期させる、決定的な決着を即座に下すことを避け、時間の余裕を作り出す働きを果たす。
 - 5) 「玉虫色表現」は、その一義性が多義性へと展開していく過程unfolding processを、受容者に自ら体験する機会を用意する。「玉虫色表現」は、そのような展開過程を経験させるための「仕掛け」（大江健三郎の「小説の方法」岩波書店、の中の言葉）となりうる、とも言える。
 - 6) 受容者に、自分以外の、他者の視点を愉しむための余裕を与える。それは、物事を、他者の視点で見ること、ひいては、他者の世界に入ること、しかも、それも自発的に、そうすることを、可能にする。そのための「仕掛け」と「玉虫色表現」が、なりうることを意味する。他者にとっての知覚、他者の世界への目を開き、気づかせるaware させる役割を果たす可能性をもつ。
- 面子（face, honor, pride）を重んじる文化では、勝敗の決着は、生死を賭けた争いとなりかねない。勝敗の曖昧化は、視点・立場・世界の異なる関係当事者が、そのような深刻な事態に追い込まれることを避けることを可能にする。「玉虫色表現」では、一人勝ちとならない。あるいは、そのようにしない。負けは、必ず、面子の喪失を伴なう。東洋には、勝っても負けても、相手を思いやる美風があった。「玉虫色表現」は、勝ち負けに関しても、多様な視点からの評価を下しそれを同時に表現することにより、勝ち負けと面子・面目の獲得・喪失を多義化する働きをもつことができる。ふと、ドストエフスキーの言葉を想起する。
- 7) 玉虫色表現は、利害深刻に対立し、衝突する場面において、その対立の緩和と「和」への道の発見への役割を果たしうる場合が可能である。小異を捨てて大同に就くことを可能にする。
 - 8) 日本には、「負けるが勝ち」という表現がある。「勝ち負け」の一義的な価値付

けから、その多義的な価値付け、多視点的な、価値の相対化と曖昧化としての「玉虫色表現」の雰囲気、この表現には秘められている。（東洋による「負けるが勝ち」の心理、参照）。

- 9) 「自己の顔」と「他者の顔」の両方への配慮を活かすことを可能にする。小乗から大乘へ、そして、両方の可能性の同時実現。関係当事者が未熟な場合は、それぞれが、自己満足することを可能にする。関係当事者が成熟している場合は、相互に、他者の立場を思いやること、その思いやりを表現することを可能にする。
- 10) 多視点化・相対化・曖昧化の働きを果たしうる。真善美、真偽・善悪・美醜、正邪、優劣、価値など。具体的に展開すると、これは、膨大となるであろう。
- 11) 「読むは、自己を読むなり」（芦田恵之助）で、「玉虫色表現」は、受容者が、他者の読みと比べて、自己の読みを見ることで、自己を知る機会を与えてくれる。いわば、E. シャハテルの意味でのロールシャッハ投影法と類似した「投影法的機能」が可能である。

以上のような「玉虫色表現」の機能は、根底に、人間の生きられた世界の多様性、人間の視点の多様性、実存の多種多様性と独自性、その相互承認などへの洞察を秘めており、その意味するところは、相対主義、懐疑主義を超えた現象学思想へと、図らずも、繋がっている。

玉虫色表現と現象学

以上考察してきた「玉虫色表現」と現象学との関連は、現象学の本質とも、深いつながりがあるように、私には、思われるようになった。

日本の現象学的哲学者の二人、竹田青嗣と西研は、現象学のもつ意義について広く見られるさまざまな誤解を指摘したのち、現象学の本質を、以下のように説いている。すなわち、現象学の本質は、「世界認識一般を、『主観—客観』構造と考えるのを止め、『信憑構造』として考える発想」をとることで、従来の「『正しい認識』、すなわち『真理』という概念」および、「普遍性」の概念を、根本的に変更したことにある、というものである。言い換えれば、「認識問題」を根本的に書き換えたことにある、という。（竹田青嗣「現象学は『思考の原理』である」ちくま新書、2004年、66ページ）。「人間の世界像一般が、共通了解の成立する領域とけっして成立しない領域の区分という本質構造をもつ」、「この基本構造が意識され、自覚されるなら、・・・宗教、思想（イデオロギー）対立を克服する可能性の原理が現れる。・・・それは、世界観、価値意識の『相互承認』という原理である」（68ページ）。「異なった世界観、価値観の間の衝突や相克を克服する原理は、ただ一つである。・・・すなわち、多様な世界観、価値観を不可欠かつ必然的なものとして『相互承認』すること」であり、この「相互承認」の確保は、「ルール形成によってのみ可能となる。」（69ページ）という。

では、現象学は、そこに、どのような貢献をするのであろうか。「現象学的還元」により、「確信成立の条件」を解明することによって、世界観の多数性の本質的理由を明らかにすることである。こうして、現象学は、「深刻な世界観の対立、信念の対立が生じたとき、これを克服する本質的な原理として構想された」（87ページ）とし、この根本動機から、「『確信成立の条件と構造』を解明する」という根本プランが現われ、それに対応するものとして『現象学的還元』という方法がうち立てられた」というのである（87ページ）。

一言で言えば、現象学は、「信念対立の克服」が、現象学の根本動機であり、「認識問題」の書き換えは、その動機に導かれている、という解釈である。

さて、竹田の共同研究者である西研の著作「哲学的思考」にも、同様の見解が、より詳細に展開されているが、その紹介がここでの目的ではないので、割愛する。

さて、現象学が、竹田と西が説くように、「信念対立の克服」ということであるでしょう。すると、これまで見てきた「玉虫色表現」の多様な動機と機能の解明から、高度で洗練された「玉虫色表現」には、深刻な「信念対立の克服」への動機が密かに秘められており、その可能な機能には、その可能性が秘められていることを覚えることができる。

日本的曖昧さの象徴とも思われる「玉虫色表現」には、少なくとも、その高度で洗練された形態には、「信念対立の克服」という効用と知恵が隠されていたのだ、と思われて来るのである。

高度で洗練された「玉虫色表現」は、「相互承認」を可能にし、他者の世界の自発的な承認を、時間を掛けて促すという仕方で、他者の認識を、フッサールの言う「再活性化」することを促す、という機能と可能性を含んでいる、と言えるのではなからうか。

現象学とは、争いを和へともたらず学である。平和共存を求める知恵である。世界観は共有できない領域に属している。本質的に、共有できること、共有できないこと、があり、その多様性を、多様性のままに、認めることを教えるのが現象学である。とするなら、多様性を通じての統一性が希求される。その実現の一つの形態は、玉虫色表現なのかもしれない。こうして、相互の立場を考えさせる「意図された曖昧さ」の積極的評価が現れて来る。

現象学は、明示と黙示の関係を明示化する、そのことにより、明示化のみでなく、黙示化を可能にする。そのことにより、明示化の過程そのものを、私たちに体験させてくれる。で、現象学における解明 *explicitation* が、経験における *implicit* なものを *explicit* にする過程であるとするならば、高度で洗練された「玉虫色表現」の創造の過程は、その逆方向の動き、相互に対立する多様な明示的 *explicit* な立場の総てを、「玉虫色表現」に凝縮させて *implicit* にする、言わば“*implicitation*”（黙示化）の過程である、とも言える。そして、現象学は、高度で洗練された「玉虫色表現」の創造において、その力を発揮しうる、と思われる。それは、黙示化であるが、単なる曖昧化ではなくて、「脱明示化」として、「玉虫色化」を捉えることも出来るからである。現象学を経た、逆現象学である、とも言えるだろう。現象学は、その双方を統合的に包含することができる。

「玉虫色表現」は、その働きにおいて、禅の公案にも、似ている。

その事例としての仙崖の禅画Zen drawing

それは、*explication process* を、その結果として示すのではなくて、受容者自身が、その過程そのものを、自ら経験させる仕掛けとなることによるのである。ふと、諺「天は自ら助くるものを助く」：“*Heaven helps those who help themselves.*”を想起する。

これはまた、Heidegger のいう、垂範的顧慮 にも似た考え方である、と言えるであろう。

「玉虫色」の日本語表現と英語表現

「玉虫色」という言葉の英語訳を求めると、“*ambiguous*”（「曖昧な」）、あるいは“*equivocal*”「多義的」しか与えられないことは、先に述べた。ここでは、このことの意味について、軽くコメントしておく。

第一は、「玉虫色」であることの評価について、日本では、確かに、「玉虫色」であることを非難する価値感情が広く存在するが、同時に、その価値を肯定的に認める価値感情も存在する、と思われる。さて、英語では、ある表現が、“*ambiguous*”（「曖昧な」）、あるいは“*equivocal*”「多義的」であることを、肯定的に評価する価値感情は、あるであろうか、英語が母国語でない私には、判断しかねるが、肯定的には評価しないのではないだろうか、という思いがある。そして、もしそうであれば、その

違いには、どのような意味があるであろうか、という問いが生まれる。

第二は、「玉虫色」という比喩的表現が、いかにも具象的で、しかも、視点による事象の見えの変化という事態を的確に表現しているのに対して、“ambiguous”（「曖昧な」）、あるいは“equivocal”「多義的」は、いかにも抽象的であるように思われる。この違いは、第一の点と関連するかもしれない。

第三に、「玉虫色」という表現は、「玉虫」という、「美しい」と見なされる昆虫に着目している点に、日本文化における昆虫への注目の一つの現われを見ることができる。例えば、「蜻蛉」は、人生のはかなさを象徴している。そのような意味での、昆虫への、しかも、象徴的で情緒的な着目は、欧米文化には見られるのであろうか。これも、知りたいところであるが、今回は、調べるには到らなかった。

ただ、注目すべき問題としてのみ、以上3点を挙げておきたい。

おわりに：玉虫色非難から玉虫色礼賛へ、そして、洞察へ

米国への留学から日本に帰国した時（1967年、1969年、そして、1981年）、日本の他者たちから、私がアメリカ化した、と評された。その変化は、物事をはっきり言う、そして、相手にもはっきり言うことを求める、という態度への変化であった。私自身は、その変化を自らは肯定的に受容していた。それは、いわば、「玉虫色」の態度から「脱玉虫色」の態度への変化であった。しかし、この変化は、日本では、それ以前の私を知る家族、友人からは、あまり歓迎されなかった。そして、時と共に、日本に住み着く時間を経るにつれて、次第に、私は再び「玉虫色」へと、知らないうちに戻って行った。それは、いわば、脱「脱玉虫色」となっていたことになる。しかし、それは、日本の雰囲気に戻るという在り方として意識はされていたが、「玉虫色」の雰囲気そのものを積極的に肯定してのことではなかったように、今の私には、思われる。しかし、或る時、「玉虫色」の表現行為を積極的に肯定している自分に気づくことがあった。こうして、何時の間にか、私は、日本では「玉虫色」に、欧米人と付き合いときには「脱玉虫色」に、という使い分けをするようになった。そのことを、二つの世界における生き方の違いとして、半ば意識するようになった。しかし、或る時までは、心の底では、「玉虫色」への非難を、程度の違いこそあれ、基本的には懐いていたように思う。しかし、「玉虫色」への、その肯定と否定が、私の中で、変化するときが来た。そして、この問題について、考えることを私は促されるに至った。

「玉虫色表現」は、争から和へ、争を超えた和へ、和と争の統合へ、言い換えれば、世界観の多様性の相互承認へ導く、糸口なのである、ということが見え始めたのである。玉虫色非難から玉虫色礼賛への移行は、玉虫色表現の表現者、受容者、観察者、それぞれの生きられた世界に「寛容」への変化をもたらし、また、その変化によってもたらされる、ということが見えてきた。

以上は、私にとっては、新たな発見であった。

以上

玉虫色表現行為の現象学的解明

淑徳大学 心理学科教授 吉田章宏

問題の発端

解明の動機 非難の提示

問題の提示

辞書的定義の列挙

比喩であることの説明

英訳語の抽象性と語源

具体的事例の幾つか

事例の広がり：「総ての表現は玉虫色となる可能性を秘めている」

正確を期するための否定の必要性、規定とは否定である

玉虫色表現行為の構造と意味：

玉虫色表現の表現者、受容者、そして、傍観者・観察者・理解者

玉虫色表現の発生

多義性、二義性がある限り玉虫色の可能性が潜在する

推敲の一要因は、多義性の除外にある

否定による多義性の排除は、玉虫色の排除の試みである

多義性の源泉

玉虫色表現の展開

総ての表現に秘められた多義性に気づかない段階

多義性の可能性に気づく段階

多義性の可能性を意図的かつ消極的に活かす段階

多義性の可能性を意図的かつ積極的に活かす段階

多義性を活かす動機が多様性に気づく段階

多様な動機が多義性を意図的かつ積極的に活かす段階

．．．．

玉虫色表現における受動と能動

玉虫色表現の動機

空間、社会、時間（ガダマー）、総合：文字通りから比喩的へ

自己防衛と他者への配慮：小乗から大乘へ、そして、両方の可能性

玉虫色表現の機能

玉虫色表現と現象学

竹田青嗣、西研 の現象学解釈

玉虫色の日本語と英語：それぞれにおける表現、比喩としての「玉虫色」

玉虫色非難から玉虫色礼賛へ

正邪、勝敗の決着、信賞必罰から、喧嘩両成敗、「負けるが勝ち」（東洋）

争から和へ、争を超えた和へ、和と争の統合へ

おわりに